



ぷらっとシネマ 永田洋子をどう描いているか『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程』（若松孝二監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15466



永田洋子をどう描いているか

—『実録・連合赤軍—あさま山荘への道程』（若松孝二監督）

1971年12月、山梨、群馬の山岳拠点を移動しながら軍事訓練を行なう青年たちがいた。武装闘争に向けての訓練に集まったのは、数カ月前に共産主義者同盟赤軍派と日本共産党革命左派の二派で結成した連合赤軍の兵士たちである。そこで12人が革命軍兵士としての姿勢の不徹底や違いを理由に殺害（「総括」ないしは「処刑」）されたことはよく知られている。若松孝二の作品は、同志殺害を含む訓練合宿の過程を追い、1972年2月、赤軍兵士5人があさま山荘にたてこもり、投降を求める機動隊と銃撃戦を交わすまでを描いている。

反権力を標榜する若松には、なんとしても批判したい映画があった。2002年公開の『突入せよ！「あさま山荘」事件』である。事件当時、「突入」を指揮した警察官僚、佐々淳行の著作を下敷きとする『突入せよ！』は、タイトルも示すように、山荘に突入する権力の視点に立つ。それを批判する若松作品では、銃撃戦を捉えるカメラは山荘のなかに据えられている。

しかし反権力かどうかは、ただ警察との対決を撮るカメラの位置だけでは決まらない。映画を見るにあたっての私の関心は、若松が永田洋子をどう描いているかという点にあった。連合赤軍が多くの同志を「総括」ないしは「処刑」するに至る過程で、永田は指導者の位置にあった。これまでの平均的な永田像は、権勢欲と醜女の怨念に駆られて同志殺戮を命じた鬼婆のような女といったものである。しかし個人の資質や人柄で事件を説明するかぎり、連合赤軍は単に「血塗られた狂気のカルト集団」でしかなかったことになる。それは若松の考えとは違うだろう。彼らの反権力と革命展望を、間違いもあったが意義もあったと若松が考えるなら、従来の永田像にどう抵抗、挑戦するかは、彼自身の反権力が試される重要点である。

映画の山場の1つは、遠山美枝子の総括だ。遠山は、指輪をはずさない、服を着替えたといった行動を革命軍兵士にあるまじきことと永田から指摘され、「美しい」顔面を自分で殴打し、衰弱のあげくに死に至らしめられる。それを「ブス」の永田の嫉妬だとするのがさんざん繰り返された一般的な見方だ。若松作品のなかの永田もまた酷薄非情な女であり、従来の永田像をただなぞっている。

永田は後年の著作で、遠山が女性の自主性や要

求を抑える組織の論理に批判的な姿勢をもっていったことを評価し、当時はそれを理解できなかったと自己批判している。問題は永田の個人的な嫉妬ではなく、ましてや1審判決の言う「女性特有の執拗さ、底意地の悪さ、冷酷な加虐趣味」などではない。当時、女性であることを否定してこそ革命軍兵士だという姿勢が同志たちに共有されていた。それを党の政治路線の問題として批判することが必要であると後の永田は言う。彼女自身、過去に男性幹部からの強姦や、活動のための便宜的結婚、中絶の強要を経験している。そうした党の女性差別を問題視せず、党に同化する永田のような女性闘士を育成したのは、革命をめざす組織として間違いであったことが、後年の彼女には見えるようになる。遠山に対する総括を、そういう間違いとして若松が描くことはできなかったのか。

映画後半の山荘たてこもりは、もうひとつの山場である。そこでリーダー格の坂口弘は、すがすがしさと内面的深さを備えた人物として描かれているのが、永田とは対照的だ。人質にした女性への丁寧な対応の描写も、坂口への好感を誘う。

永田、坂口をはじめとして、連合赤軍、あさま山荘事件の当事者による著作はいくつも刊行されている。私が見るところ、著作から浮かびあがる永田と坂口の人物像は、映画とはだいぶ違っている。永田は、自分の責任を凝視しつつ、革命政党としての間違いを正そうと思案と獄中闘争を重ねている。とりわけ、そのフェミニズムの覚醒と、殺害した女性同志への遅まきの敬意は、果たしきれない責任を負った者の真摯な反省があってこそ生まれたものと思われる。坂口はといえば、分離公判を選び、永田を「同性いびり」と指弾し、指導者としての自らの責任を忘れて自己保身に汲々としているように見える。以上は私ひとりの見解だとしても、反権力を標榜する若松が、私財を投じてでも連合赤軍とあさま山荘事件の意味を後世に伝えようというなら、一般に流通するイメージに対する抵抗と挑戦のヒントは、当事者の著作を見るだけでもたくさんあるのはまちがいない。

2006年11月、永田の再審請求は棄却された。病を抱えながら、死刑確定囚として闘いを続ける永田に本作を見る機会はあるだろうか。

(2007年、日本、190分)